O 067

熱帯病治療薬研究班(略称)におけるパロモマイシンの使用経験

[1]結核予防会　新山手病院　内科、[2]東京大学医科学研究所　先端医療研究センター　感染症分野、[3]長崎大学　熱帯医学研究所

○木村 幹男[1]、古賀　道子[2]、菊地　正[2]、清水　少一[2]、三浦　聡之[3]

【目的】熱帯病治療薬研究班(略称)は熱帯病・寄生虫症に対する国内未承認薬を導入し、「臨床研究」として患者に投与する体制を構築している。研究班は従来、赤痢アメーバ症の再発予防にフロ酸ジロキサニドを導入していたが、それが入手難となったことから、2004 年にパロモマイシンに変更した。今回我々はパロモマイシンの使用症例につき、主に安全性の観点から、一部有効性の観点からの検討を行った。【方法】本薬剤を使用後に提出された治療報告書の中で、解析可能なものを選び出し、主に記載内容を元にして安全性と有効性の検討を行った。治療報告書の記載が不十分な場合には、主治医への直接の問い合わせも行った。なお、無症状/軽症シスト排泄者で本薬剤を服用した者のうち、便中栄養体の検出、大腸鏡所見(組織での原虫検出を含む)、便を用いた PCR 診断などにより、*E. dispar* でなく赤痢アメーバによる感染と判定された例につき、薬剤の有効性を検討した。【成績】対象症例は 145 例で、うち 31 例(21.4%)では HIV 陽性と記載されていた。疾患としては 143 例が赤痢アメーバ症(大腸炎 123 例、肝膿瘍 16 例、両者の合併 4 例)で、ジアルジア症が 2 例であった。用法用量としては、1,500 mg/日・9〜10 日間が多かった。副作用ありと記載されたのは 23 例(15.9%)で、そのために服用中止したのは 7 例(4.8%)であった。記載された副作用の多くは軟便〜下痢、および他の消化器症状であった。他に皮疹、肝機能障害、血便(偽膜性腸炎)が各 1 例ずつ報告されたが、後 2 者については必ずしも真の副作用とは思えなかった。また、赤痢アメーバ症の無症状/軽症シスト排泄者で本薬剤が投与された 11 例では、全例でシスト消失が見られた。【結論】パロモマイシンは我が国においても安全性と有効性に特別な問題はなく、有用な薬剤と思われた。【会員外共同研究者】丸山治彦(宮崎大学医学部寄生虫学分野)

O 068

人工呼吸管理患者における口腔内所見と人工気道各部の培養結果

[1]岩手県立磐井病院　ICT

○高橋 幹夫[1]

【目的】VAP 予防バンドルにおける口腔内ケアは重要なケアのひとつである。当院では、2012 年より人工呼吸管理患者の口腔内ケアに歯科医師も加わることになり、ケア時の口腔内所見をカルテ記載することにした。そこで、観察記録と人工気道の細菌培養との関係を検討し、口腔内所見の必要性を検討した。

【方法】歯科医師が口腔内ケア時に状態チェックをカルテ記載している人工呼吸管理患者において、気管チューブ交換時に使用済み気管チューブを細菌培養する。培養方法は、気管チューブを口腔部分、カフ上部部分、チューブ先端部分の 3 点培養で、その部分の外側と内筒のそれぞれ 2cm× 1 cm エリアを綿棒で拭い、各 2 cc の生理食塩水に溶解する。その溶解液 0.5cc を定量培養する。なお、嫌気性培養は実施していない。チューブ交換が 2 回以上実施された患者を集計対象とし、小規模病院であることから基礎疾患等の患者背景や抗菌薬投与等の治療条件は考慮していない。

【成績】症例 1 は 32 歳女性で、辺縁系脳炎で意識障害から人工呼吸管理。口腔内ケア観察では、いつも「磨き残しや悪臭がなく、きれいである」であった。不明熱から抗菌薬投与中で、2 回の 3 点培養では全て細菌数は 1 桁であり、黄色ブドウ球菌がほとんどであった。肺炎の併発なし。

症例 2 は 43 歳男性で、高所転落で両側外傷性気胸から人工呼吸器管理。口腔内ケア観察では「ぬめりあり。悪臭有。清掃状態不良。咽頭部からの吸引では白色や黄色のものが吸引された。」が多かった。肺炎治療として抗菌薬投与中であり、4 回の培養ではいずれも細菌数が 5 桁〜2 桁と多く、菌種としては黄色ブドウ球菌がメインで口腔内常在菌や腸内細菌科の細菌も確認できた。

【結論】口腔内を第三者が観察評価することが、口腔内ケアのレベルアップやケアの継続に関与し、VAP 防止にも好影響を与えると推察される。今後、症例数を増やしていきたい。【共同研究者】中池祥浩